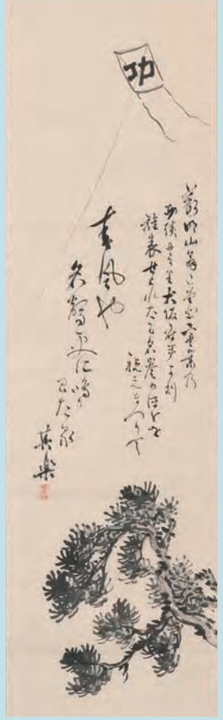
藪家のこと、引退後の明山

藪家は淡路島・福良に本家があったことから、明山は同地の庄屋・岡田家から妻・カヨを迎えました。明山の跡継ぎである恒夫（二代明山、1868～1941）は、明山の母・トキの実家（岡山県津山の儒学者・中西家）から藪家に入りました。明山は明治末年頃には工房の経営を恒夫にゆだねて引退したようで、引退後はさまざまな博覧会の出品委員や工芸協会理事、地域活動の役員を歴任、大正9年（1920）2月には大阪府の実業功績者表彰を受けています。また、明山をはじめとする藪家のひとびとは大阪市にあった堂島教会（のちに浪花教会に合併）で洗礼を受けたクリスチャンだったことから浪花教会の理事としても活動しました。

浪花教会での藪明山こと政七の葬儀の様子
（大阪歴史博物館蔵、森田和子氏寄贈）
明山は昭和9年（1934）5月2日に永眠しました。

自宅2階での藪恒夫（部分）
（大阪歴史博物館蔵、菅野京子氏寄贈）



片岡其楽筆「俳画明山功労者表彰記念」（部分）
（大阪歴史博物館蔵、中嶌ちせ子氏寄贈）
大正9年（1920）の大阪府実業功績者表彰の祝いに贈られた俳画には「春風や名声更に鳴りわたる」とあります。

【表紙掲載作品】
1.白象唐子遊図皿（大阪歴史博物館蔵、森田まみ子氏寄贈）
2.風景図花瓶（大阪歴史博物館蔵、森田まみ子氏寄贈）
3.藪明山肖像（大阪歴史博物館蔵、森田和子氏寄贈）
4.藪明山名刺（大阪歴史博物館蔵、森田まみ子氏寄贈）
5.牡丹詰文花鳥人物図丼（大阪歴史博物館蔵、中嶌ちせ子氏寄贈）
6.風景図花瓶（大阪歴史博物館蔵）

展示解説

担当学芸員が展示内容や作品の見どころについてご案内します

【日　時】　令和7年9月6日（土）、10月18日（土）　各回とも午後2時より30分程度
【講　師】　中野朋子（当館学芸員）
【会　場】　大阪歴史博物館 8階 特集展示室
【参加費】　無料（ただし、入場には常設展示観覧券が必要です）
【参加方法】当日直接会場へお越し下さい。（事前申込不要）

特集展示　YABU　MEIZAN

＊本展は JSPS 科学研究費 19K00209 の助成を受けた研究成果の一部です

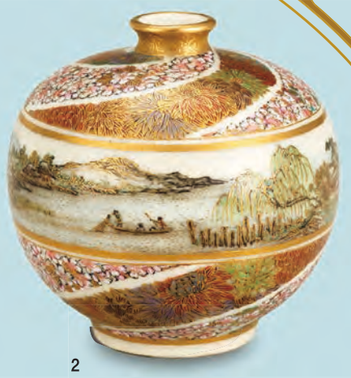
会　　期：令和７年（2025）９月３日（水）～11月３日（月・祝）
会　　場：大阪歴史博物館８階 特集展示室（常設展示場内）
主　　催：大阪歴史博物館
展示担当：中野朋子
開館時間：午前９時30分～午後５時
※入館は閉館の30分前まで
休 館 日：毎週火曜日　※ただし9月23日（火・祝）は開館、24日（水）は休館
観 覧 料：常設展示観覧料でご覧になれます。
大人 600円（540円）
高校生・大学生 400円（360円）
※（　）内は20名以上の団体割引料金
※中学生以下・大阪市内在住の65歳以上（要証明証提示）の方、障がい者手帳等をお持ちの方（介護者1名を含む）は無料

電車・バスでお越しの方
Osaka Metro谷町線・中央線「谷町四丁目」駅②・⑨号出口
大阪シティバス「馬場町」バス停前

大阪歴史博物館
Osaka Museum of History
〒540-0008　大阪市中央区大手前 4-1-32
電話:06-6946-5728　FAX:06-6946-2662
https://www.osakamushis.jp/

1

特集展示



2

YABU MEIZAN.

2025 9月3日(水)～11月3日(月)・祝

火曜日休館
ただし
9月23日（火・祝）は開館、
24日（水）は休館

3

4

藪明山

5

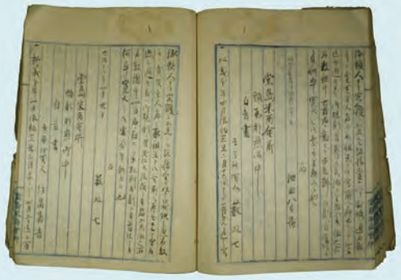
6

大阪歴史博物館
Osaka Museum of History

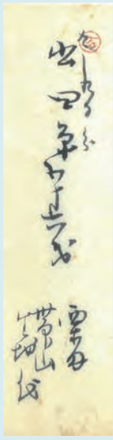
創業から草創期の「藪明山」工房

藪明山こと政七（1853～1934）の履歴書によれば、明山は嘉永6年（1853）に南画家・藪長水（1813～1867）の子として大阪で生まれ、幼くして明山の祖父にあたる儒学者・藪鶴堂（1773～1849）の生家を継ぐために淡路島・福良に渡り、15歳までを過ごしました。福良で明治を迎えた明山は明治元年（1868）、大阪へと戻り「商業実地研究」あるいは「実業」に従事しました。そののち「感ズル所」があり、明治13年（1880）、明山が27歳の時に大阪・中之島に「陶器描画場」を創業したのです。

藪 政七 肖像写真（部分、原本ガラス乾板）
（大阪歴史博物館蔵、森田和子氏寄贈）
18歳2ヶ月の時、淡路島で撮影されたとの書付がある写真



『四月限米売買中止一件』（関西大学図書館蔵）より、藪政七の自首書（写）収録部分
この文書の記録によって、藪明山こと政七が明治13年（1880）3月時点で堂島米会所の「一等仲買人」であったことがわかりました。



明山工房草創期の文書が断片的に残されています。これらは、藪家に伝来した作品や資料群の箱のなかに梱包材として詰められていた、いわば反古紙でした。太平洋戦争の戦禍が拡大するなか、明山工房から兵庫県に疎開する際に、すでに不要となっていた帳簿類を転用したもののようで、内容は断片的です。しかし、なかには工房運営に関わる一次史料が含まれ、また明山工房創業期の記録も散見されるなど、貴重な史料となっています。

粟田帯山への支払い記録　（部分、藪家文書より抜粋）

明山、世界へ

明山による薩摩焼上絵付工房の創業は海外への販売を前提としたものでした。そのため、草創期から欧米を中心とした諸外国への販売を視野に活動しました。明治20年代初頭には、明山の第二のふるさとであった淡路島・福良の人脈をいかして訪日外国人への直接販売を試みるなど、販路の開拓・拡大に心を砕いていたこともわかっています。明山自身も、明治26年（1893）のシカゴ万博に際しては大阪出品協会理事に就任するなど、国内外の博覧会の出品や運営を担う立場として、フランスおよび周辺国、アメリカ、イギリスへの渡航が確認されています。

エジプトからのたより（大阪歴史博物館蔵、森田和子氏寄贈）
明治33年（1900）にフランス・パリで開催された万国博覧会からの帰路に自宅に宛てて送られたハガキ。エジプトのポートサイドから12月4日の晩に出港し、翌年1月9日の朝に神戸に到着する予定であることを家族に知らせています。

草創期の明山工房と「藪明山」のブランディング

明山ブランドの薩摩焼作品に確認できる金彩銘は［藪明山］のほか、［明山製］［大日本明山製］［明山］などが知られます。近年、明山作品の底部や高台に、素地を焼いた窯元名である［帯山］や［明山］の印銘が施された作品の存在を確認することができました。藪明山がアートプロデューサーとして、“YABU MEIZAN”ブランドをどのようにブランディングしていったのか、作品や史料を通して考えていきます。

上絵金彩人物風景図花瓶（横山美術館蔵）と「帯山」の印銘

明山工房の素地の購入先

創立から明治20年代：京都・粟田焼の「帯山窯」や「光山窯」
明治18年（1885）から：鹿児島の「沈壽官窯」とも取引を開始

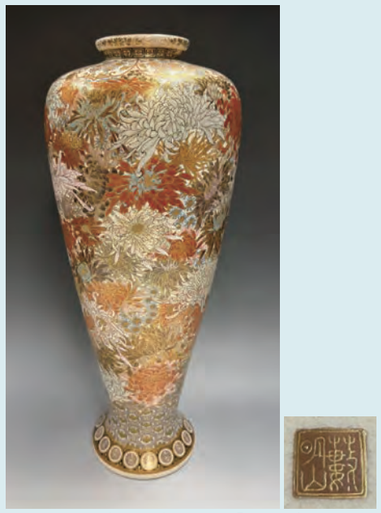
明山による作品の製作管理

（1）素地の発注先と品質
（2）銅版による下絵付
（3）金彩銘（トレードマーク）

菊花人物図花瓶（個人蔵）と「明山」の印銘

欧州から里帰りした「藪明山」銘の花瓶（個人蔵）の高台には「明山」の印銘がある

鉢木図茶碗（個人蔵）と金彩銘「明山製」



菊花詰文花瓶（個人蔵）と金彩銘「藪明山」

藪明山工房での製作品の傾向

創立から明治10年代

いわゆる「京薩摩」に酷似した品を手がける
→**鉢木図茶碗**や**白象唐子遊図皿**（表紙）
上絵付の特徴：力強く大胆だが、最盛期の緻密さは感じられない
金彩銘：「明山製」ほか

最盛期：明治20年代～30年代半ば

小型で細密な上絵付の作品の製作が多いがやや大型の作品も製作
上絵付の特徴：植物の詰文（牡丹花や菊花）、風景図、人物図などを取り合わせたもの多数
人物図は下絵銅版で管理
金彩銘：「藪明山」

後期：明治40年代～大正期

あっさりとした日本的な文様の上絵けが増加
カップ＆ソーサーなどの実用品も製作
二代明山に代替わりか
金彩銘：「藪明山」「明山」

館蔵作品にみる金彩銘

花鳥図大皿「大日本明山製」

上絵付用下絵銅版「明山製」

白象唐子遊図皿「明山製」

風景風俗図花瓶「藪明山」

蝶散らし図皿「藪明山」

紫陽花文香炉「明山」